

(概要)

東側の「プロパガンダ放送」だと位置付けられたソ連時代のモスクワ放送。外国人である日本人職員はどんな動機で働いていたのか。共通して言えるのは、二つの国の交流を支える接点であろうとしたことだとは言えるのだろうが、もちろん時代や個性によって異なる点もある。2023年11月に出版した拙著『MOCT（モスト） 「ソ連」を伝えたモスクワ放送の日本人』（集英社）で取材した人々を中心に考察する。

1, 自己紹介と執筆の動機

～MOCTは研究書ではなく、エンターテインメント色の強いノンフィクション作品

2, ソ連国籍を持たない世代のアナウンサー群像

■西野肇（1947年～、在籍73～83年）

・法政大卒業後、在京キー局の情報番組ADを3年間。ロシア語学習歴なし。心情的には左翼的で反ソだったという。「プラハの春（68年）でチェコスロバキアに同情していた」

・働いていた民放局に、モスクワ放送東京支局長のオフシャニコフがリクルート活動。上司の勧めで応募。課題はラジオ番組の製作。＜吉田拓郎と連想ゲームをし、宮崎総子にナレーションをつけてもらった＞

⇒西側の娯楽放送の素養が評価された？

⇒それまでの社会主義体制に賛同して働いた人たちとは全く異なる動機

・オフシャニコフ「思想の自由は守ります。心配しなくてよいです」。

・西野「自分は滝口新太郎さん（元俳優、1971年病死。岡田嘉子の最後の夫）の後釜」

・「労働組合がどうこうとか、つまらない放送を変えてやろうと考えた」。西側の音楽・ディスクジョッキー、街頭録音（ソ連人の番組スタッフは警察官からチェックされたことはあるという）を通じて日本の聴取者を引き寄せる放送を志向。「★自由にやらせてもらった」

・聴取者獲得に貢献（83年の宣伝紙「エコー」は全ページに西野が登場している）。長髪、ジーンズ姿。70年代的な日本の若者がモスクワで暮らしていた！？

・親ソ的でない西野の採用の意図は？（推測）札幌五輪（72年）にソ連選手団の通訳を務めたユダヤ系ロシア人のリップマン・レービン課長は日本のテレビ・ラジオを視聴し、その手法を取り入れようとしたのか？

・西野はニュース解説など中核的番組にはあまり携わっていなかった模様。アフガン侵攻（79年）、「モスクワ五輪をボイコットした日本批判」（80年）に関するニュースに携わった記憶がないという。「モスクワ五輪のニュースは読んだが、日本選手が登場しないのでつまらなかった」。宮永スパイ事件（80年）、モスクワ日本大使館職員のトビリシ毒ウオッカ事件（80年）は知らなかったという。

⇒音楽や若者向け情報番組を中心に西野を起用。ブレジネフ時代のプロパガンダの色彩は変わっていなかったのではないか（実証するにはラジオプレス出版物などを通じて放送内容の分析が必要？）。

・西野は前世代でソ連社会主義体制に共鳴してソ連人になった袴田陸奥男（テニスの先生）、清田彰（ラジオドラマ「ドストエフスキーの生涯」で父親役を演じてもらった）、岡田嘉子（旧式の炊飯器をもらった）と働き、彼らとの関係も良好だった。

・リトアニア・ビリニュス生まれのロシア人女性と結婚し一女を得たが、モスクワ生活に10年で見切りを付けた。「このままいたら同化してしまう」。35歳で日本の番組製作会社に就職。柔軟性、適応能力の高さからソ連・ロシア関連を含めて、民放・NHKの番組を製作。

■日向寺康雄（1958～2024年、在籍1987～2017年）

・早大一文露文科卒。推薦入学が決まると同時に、中国大使館やソ連大使館とコンタクトしていたという。9年間の大学生活。民青系サークル「のびる会」でボランティア活動。ベトナム難民一家の支援をしたことで、アイドル歌手をプロデュースすることに。

・82年ころ、論文コンクールで入賞。モスクワ旅行を獲得し、岡田嘉子と出会い、モスクワ放送入りを勧誘される。空気がなく、すぐ実現せず。83年にも訪ソ。

・一文の講師が社長を務めていた「群像社」でアルバイト。内定するも83年大韓機事件で消える。85年に早大卒業後は、新聞配達のアパートで食いつなぐ。

⇒西野とは違い、もともとソ連・ロシアにシンパシーを持った人物像。

・87年12月翻訳員としてモスクワ放送入り。アナウンサーも兼ねる。「ペレストロイカ 改革の時間」も担当したが、西野同様に音楽番組で頭角を現す。当時のペレストロック（「キノー」ほか）を日本に紹介した先駆者と言えそうである。

・91年のソ連崩壊、92年以降の新生ロシア、「ギャング資本主義」を体験。

・「ロシアの声」と改名した90年代半ばの放送は、「政府批判も可能だった」。日本語放送存続の危機を経験。待遇も大きく悪化。音楽家の呼び屋活動で生計を立てたという。

⇒存在意義の一つである「プロパガンダ放送」性を失っていく。

・10年間で退職した西野と違い、30年間アナウンサーを続けた。

・2011年の東日本大震災後にアンナ・ゲルマンを流し、被災地への連帯の放送。ラジオ放送終了後の16年には捕虜になって北極圏で死去した元日本軍将校の遺族を手弁当？で案内し、放送。

⇒日向寺は日ロ友好に仕事の意義を見つけようとしていた？

・就職のきっかけを作った岡田嘉子ら先駆者への尊敬の念があり、放送の歴史の発掘にも関心を持っていた。

■山口英樹（1964年～、在籍89～93ころ）

・東京外大露語科卒。会社員を経て、89年に入局。アナウンサーとして活動。日向寺とと

もにペレストロークを日本に紹介。

・日向寺が帰国中の91年8月のクーデター時の放送を担当。音源がユーチューブに残っている。

⇒レービン課長は「普段は慎重な課長だが、番組に直接出た」。レービンが改革派にシンパシーを感じていたことを示唆している。

・「当局の言い分をありのままに伝えた」

3, 旧世代の人たち

① 亡命・潜入（片山やす、岡田嘉子、河崎保・美智子ら）

② 南樺太のソ連編入によって使われた現地民（有江逸郎、中山雅之ら無国籍だった人も）

③ 抑留後、スカウトされ亡命（清田彰、川越史郎、赤沼弘、袴田陸奥男、滝口新太郎ら）

⇒詳しくは次の田中先生のご報告で

■抑留された日本のエリートがソ連人に。清田（せいた）彰と川越史郎

清田（1922～2011年、在籍1948～92年ころ）岡山県出身、山口高商在学中、召集。主計見習士官として満州で敗戦、ソ連抑留。語学に堪能。52年ころソ連の市民権を得て、ロシア人女性と結婚、1女。モスクワ大経済学部卒。寒中水泳、マラソン。「まじめな努力家」（元NHKディレクターの馬場朝子）。翻訳の丁寧さを伝える記録が1960年ごろのアナウンス日誌に記録されていた。その後はアナウンサーとして活動。NHKのアナウンス読本を取り寄せてトレーニングしていた。

フルシチョフ時代に街頭録音を試みる（警察に捕まったことも）。「宇宙遊泳」「東洋の魔女」と放送（発明者かどうかは確認できなかった）。ブレジネフ時代は「仕事は言われたことだけをやり、創意は絶無」（本人の手記。西野の回顧話と異なる）。

勲章を得たが、ソ連共産党員にはなっていない。

ソ連崩壊。92年2月の岡田嘉子の葬儀で、ソ連に批判的なあいさつ。裏切られた気持ちを隠さず、日本の左翼系雑誌に心情を吐露。ただし、自分の人生をどう総括していたかは不明。晩年、地元岡山の民放局がモスクワの自宅を訪れるが、インタビューを受けなかった。

川越（1926～2006年、在籍1948～61年ころ、その後は「プロGRESS出版」のソビエトグラフ日本版編集）は宮崎県出身。七高在学中に召集。満州で敗戦。ソ連抑留。ハバロフスク放送局を経て、モスクワ勤務。ロシア人女性との間に2男。

70年代に来日した際には高度経済成長し、ソ連より豊かになった日本にショックを受けた様子を隠していない。

ペレストロイカ時代は家庭不和に悩む。長男がロックバンドを結成すると、日本の楽器を輸入して援助。徐々に体制に疑問を持つようになっていた？

ソ連崩壊後、90年代は来日したほか、NHKウラジオストク支局開設を手伝い、その後は

長男とカナダに移住するがすぐにモスクワに戻る。

「回遊魚の人生」。2004年にモスクワのアパートで筆者の取材に応じた川越は、年金生活の厳しさを語りながらも落ち着いた様子だった。晩年は「日ソ相互理解と日ロ友好を訴える放送」だったことに意義を見いだそうとした（2005年の日本の左翼系誌への投稿）。

4. まとめ

共通していたのは、日ロ友好に尽力したいという意欲。ただし、ソ連・ロシアに骨を埋め、体制の中で生きた人たちが幸福であったかと言えば、残念ながらそうではなかったのではないか。早く見切りを付け、ソ連・ロシアと客観的な関係を保った人の方が幸せになっているようだ。

放送はソ連崩壊で西側陣営に引き込まれた後は、プロパガンダ放送としての存在意義を失っていき、停波に至る。ウクライナとの戦争が始まって、国内的には旧来型メディアが自国民にプロパガンダ活動をしていると伝えられている。いま対外放送があったら、どんな機能を果たしたのか？現在はスプートニクの文字情報があるが、影響力は持っているようには見えない。

【参考文献等は「MOCT」巻末をご参照ください】